

創造の構造——設計者のための地図

プロジェクトデザイン論 — M2 創造プロセス

2026 年 02 月 19 日

目次

はじめに	2
定義	2
構造	2
プロセス	2
類似概念	3

はじめに

創造を「よいアイデアを出す能力」として捉えると、観察できないものを語ることになる。ここでは創造を、場→波→縁→渦→束という連続的な変換として記述する。この5段階は説明のためではなく、「今どこにいるか」を診断し、「次に何をすべきか」を判断するための地図として使う。

定義

段階	名称	構造	プロセス	生成されるもの
1	場 (Field)	未分化	漂う	可能性の母体
2	波 (Wave)	ゆれ・対立	分離	差・方向性
3	縁 (Relation)	境界・関係	繋がり	ルール・制約・接続
4	渦 (Vortex)	個・立ち上がり	包摂・融合	まとまり (プロトタイプ)
5	束 (Bundle)	方向	集合	構造化された成果

構造

5段階は直線ではなく循環する。束から場へ回帰すること——生まれた構造を前提として次の違和感を漂わせること——が創造を継続させる。

発散と収束という二分法で見ると、場→波→縁が発散寄り、渦→束が収束寄りになる。ただしこの二分法の限界は、縁という段階が消えることにある。縁は矛盾が最も高まり、単純な対立では収まらない関係が立ち上がる場所で、ここに留まれるかどうかは創造の質を決める。

欠損駆動思考との接続：M1（意識 OS）で Withhold された問いが、5段階を通して構造へ変換されていく。場は Withhold された欠損が未分化のまま漂っている状態であり、波で F-O 評価（生存軸・愛着軸）によって対立として立ち上がる。縁で複数の評価が交差し、渦で新しい構造として欠損が再統合され、束で再利用可能な知として残る。

プロセス

段階	観察できるサイン	落とし穴	次の一手
場	言語化できない違和感。「何かがおかしい」	すぐに定義しようとする	欠損を保持して漂わせる
波	対立・二項が立つ。揺れている	どちらかを早く決着させる	差を並べ、対立の情報量を保つ

段階	観察できるサイン	落とし穴	次の一手
縁	矛盾が消えない。関係が増える	不快を避けて逃げる	境界の上で関係を編む。仮説を小さく置く
渦	まとまりが立つ。説明できる形が現れる	形を守りすぎる	渦の境界条件を言語化する
束	方向が定まる。再利用可能な構造が残る	固定しすぎて更新が止まる	束から場へ回帰し、次の欠損を生む

類似概念

5 段階は他の領域でも類似の構造が観察される。対応は完全ではなく、ずれ・重なり・欠落を含む。ここでは「どこが似ているか」と同じ比重で「どこがずれるか」を記述する。

創造性研究

Wallas の 4 段階（準備→孵化→照明→検証）との対応：孵化 ≈ 場→波、照明 ≈ 縁→渦、検証 ≈ 束。ずれ：線形で循環が薄い。縁の質が粗い。

Guilford の発散/収束との対応：発散 ≈ 場→波→縁、収束 ≈ 渦→束。ずれ：二分法では縁が消えやすい。

フロー体験（Csikszentmihalyi）は段階ではなく、5 段階のいずれの移行時にも生じうる進行の質として扱う。

数学・物理

スピノルの変換構造（分離→関係→統合）は、Stage 2～4 の局所的な補助線として有用。由来の証明ではなく、「分離から関係、関係から統合」という変換の直観を言語化するための鏡として使う。5 段階全体を覆うものではない。

哲学・思想

西田幾多郎の「純粹経験」——分節化される前の経験——は、場～波の間を記述する補助線になる。野中の SECI モデルにおける「場（Ba）」は生成の前提条件として類似するが、社会的コンテキスト（M3）に寄っており、M2 の場（個人内の未分化状態）とは次元が異なる。

精神分析・心理学

Bion の「宙吊り（negative capability）」——答えのない状態に留まる能力——は縁の核心と重なる。不確実性の中に留まるのが創造の条件であるという洞察は、縁の作法と同型。ずれ：Bion は主に

対人・臨床文脈で記述しており、個人の認知プロセスへの直接適用には解釈を要する。